

日生の実践を広げたい

田中文裕・里海づくり研究会議事務局長

「海のゆりかご」と呼ばれ、生態系を大きくむ海草アマモ。漁業者と地域が手を携え、再生に取り組みのが備前市の日生である。こととして31年となり、消滅寸前から最盛期の半分近くに盛り返した。岡山市のNPO法人里海づくり研究会議の理事で事務局長、田中文裕さん(62)は県庁時代から知恵袋として携わり、日生で先月開いた「全国アマモサミット」の実行委員長を務めた。貴重な実践を、未来へどうつなぐのかを聞いた。

功でした。一番古くから取り組む日生と、全国で関わる人たちが熱意を共有できました。

「これまでの道のりを振り返って思うことは、2011年に急逝した一人の漁師を抜きに語れません。伝統の「つぼ網」漁の傍ら再生活動の先頭に立った本田和士さんです。私が出会ったのは岡山県の水産課にいた35年前。長年の経験から魚の生活史や移動経路を熟知してアマモ場が減ったままでは魚の隠れ場も餌場もない、稚魚を放流するだけでは駄目だと語ってくれました。それが出発点です。

アマモの力

「これからの豊かな発想を大事に育てたいですね。今は魚にしても本場において少量多品種の旬のものが消費者になかなか届きません。「旬産旬味」というべき食文化をアマモを通じて提案し、里海、里山、街を人と物の流れでつなぐ循環型地域社会の在り方を発信するの、私たちの役目と考えています。



「藻場減少への危機感が、まだなかった頃でしょう。日生の海はアマモ場のおかげで海底の酸素が豊富で、水温上昇も抑えるため豊かな生物多様性が維持されてきました。ですが1950年代に590畝あったのに5畝まで減ったんです。一方で日本のアマモ場研究の草分けが岡山県で、再生に向けて種子を採取する技術を実用化していました。そこに本田さんら漁師が名乗りを上げ、まず85年にわずかに残るアマモ場から得た種子を海にまいたんです。

「魚も戻ったんですね。半世紀近く姿を消していた、モエビやアイゴが帰ってきました。漁協の主力の力キ養殖でもアマモ復活の効果で好影響が出ています。今は漁協を挙げた取り組みとなり、総合学習に取り入れた日生中の生徒や一般の市民も参加しています。さらに昔の面積に戻すのが目標です。

「成功例である日生以外への広がりはどうでしょう。海はつながっています。ここだけ良ければいいわけではありません。瀬戸内海、そして全国の沿岸域にノウハウを広げて海の環境を改善したい。岡山県内では笠岡などで既にアマモ再生が本格化しています。一方で日生では漁師たちが先頭に立っていますが、地域によってはあまり漁業者自身に関わっていないのが壁でもあります。

「漁業者の高齢化も進んでいますからね。マンパワーを呼びたいですね。高知大農学部卒、同大学院農学研究科(栽培漁業学専攻)修士課程修了。79年に岡山県技術士となり、アマモ再生やノリの色落ち対策など水産行政に携わる。11年に水産課長で県を退職し、瀬戸内海の研究者らを集めたNPO法人里海づくり研究会議を立ち上げる。12年から現職。岡山市在住。

